

令和元年6月12日現在

機関番号：12606

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2018

課題番号：17K13348

研究課題名(和文)セノオ楽譜と洋楽受容

研究課題名(英文)"Senow Gakufu" and the Reception of Western Music in Japan

研究代表者

越懸澤 麻衣 (Koshikakezawa, Mai)

東京藝術大学・音楽学部・講師

研究者番号：10755375

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、セノオ楽譜のデータベースを作成し、そのデータの分析および同時代の雑誌記事などの言説研究により、セノオ楽譜の特徴を明らかにした。セノオ楽譜が、どのように大正時代の音楽文化 帝国劇場や浅草オペラでの上演演目、レコードに収録された曲目 と密接な関係を持っていたかを多角的に研究することができた。セノオ楽譜は、大正時代の洋楽受容において、とりわけ一般大衆に向けた受容において、大きな意義をもっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

セノオ楽譜は、まさに大正時代の音楽界の縮図のような楽譜である。人気の竹久夢二の表紙画ばかりでなく、大衆から好まれた帝劇や浅草オペラでのレパートリー、来日したりレコードで聴くことのできたりした海外の著名な演奏家の愛奏曲を出版するなど、セノオ楽譜は大正時代の音楽文化を語る上で欠かせないさまざまな要素と結び付いている。

また、妹尾はこうした精力的な出版活動の他に、音楽に関わるさまざまな活動をした。これらの活動は相乗効果を挙げ、日本の音楽界の最高峰で活躍する人々との人脈が彼の活動全体を支えていたのである。

研究成果の概要(英文)："Senow Gakufu", a series of sheet music published by Koyo Senow (1891-1961), was very popular during Taisho period. This series contained many kinds of music, such as songs, arias from operas and operettas, folk songs, military marches, and violin pieces, of both Japanese and Western. This study aims to clarify information concerning "Senow Gakufu" and considers what Senow's intentions were for the publication and the features of this music series. In this survey I highlight analysis that "Senow Gakufu" resembled a miniature version of the music scene during the Taisho period. This is because the repertoire of "Senow Gakufu" related to important musical aspects of this era.

研究分野：音楽学

キーワード：洋楽受容 楽譜出版

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

明治期に本格的に日本に導入された西洋音楽は、大正時代に入ると、一部の上層階級だけのものから一般大衆へと大きく広がりを見せた。そのことを端的に示すのが、楽譜出版社が乱立し、数多くの洋楽の楽譜が出版されたという事実である。このことは、一般家庭にもピアノやヴァイオリンなどの西洋の楽器が普及し、楽譜が「商品」として価値を持ち始めたことを意味する。しかし、洋楽受容が近年盛んに研究されているにもかかわらず、これまでは特定の作曲家(たとえば「日本におけるベートーヴェン受容」や「日本におけるパッハ受容」)や特定の機関(たとえば東京音楽学校や三越少年音楽隊)などに関心が向けられ、「楽譜」についてはほとんど取り上げられてこなかった。

### 2. 研究の目的

本研究は、大正時代に絶大な人気を誇ったピース楽譜のシリーズ「セノオ楽譜」の実態を調査し、800を超えるレパートリーの詳細なデータベースを作成することによって、この楽譜シリーズの特徴や意義を考察することが目的である。竹久夢二が多くの表紙画を描いたことで知られる「セノオ楽譜」は、その知名度の高さとは裏腹に、「楽譜」としての(つまり、本来の)価値や意義については、これまで顧みられることはほとんどなかった。もちろん、セノオ楽譜の人気を支えた重要な要素であり、積極的に宣伝にも用いられていた。とはいえ、「楽譜」であるからには、音楽的な側面からのアプローチも必要だということは明らかである。

というも、西洋音楽が時空間を超えて鳴り響くためには、楽譜という「メディア」が重要な役割を果たす。需要と供給のバランスの中で展開される楽譜出版の動向は、その時代の音楽界を映し出す鏡と言っても過言ではない。そのため、楽譜出版の研究は、大正期の洋楽受容の一端を明らかにすることにつながるのである。

### 3. 研究の方法

- ・全セノオ楽譜の情報をデータベース化し、インターネット上で公開する。

この「セノオ楽譜データベース」には、シリーズ名、目録番号、表紙タイトル、収録作品、作曲者名、編曲者名、作詞者名、訳詞者名、歌詞の言語、表紙画の画家名、表紙画・楽譜の冒頭ページの画像、編成、ページ数、解説、初版の年月日、現存する楽譜の版・出版年月日・所蔵先のデータを収めた。

- ・そのデータの分析によって、セノオ楽譜の特徴を明らかにし、その結果を大正時代の文化的・社会的なコンテキストのなかに位置づける。

具体的には、出版点数の変遷、収録作品のジャンル・作曲者の観点から統計的に検討する。

- ・セノオ楽譜、およびその出版人である妹尾幸陽について、当時の雑誌や新聞記事や同時代人の回想録などの文献調査を行う。

雑誌・新聞の主な調査対象は、『音楽界』、『月刊楽譜』、『音楽年鑑』、『新音楽』、『読売新聞』とする。

### 4. 研究成果

セノオ楽譜は、大正時代の音楽文化、そして洋楽受容の様子を实によく反映している。人気の竹久夢二の表紙画ばかりでなく、大衆から好まれた帝国劇場や浅草オペラのレパートリー、来日したりレコードで聴くことのできたりした海外の著名な演奏家(ミッシャ・エルマンやフリッツ・クライスラーなど)の愛奏曲や日本を代表する声楽家(三浦環、藤原義江など)の愛唱歌、そして徐々に台頭してきた日本人作曲家(山田耕筰、藤井清水など)の作品など、大正

時代の音楽を語る上で欠かせないあらゆる要素と密接に結びついている。セノオ楽譜によって、音楽の流行が創出され、そして支えられた（たとえば成田為三の『浜辺の歌』やグノーの『夜の調べ』）。この事例は、楽譜出版が人々の音楽の趣味に影響を与えていることを示している。

印刷楽譜は、音符として自律した存在ではなく、商品として売られるさまざまなイメージの複合体である。セノオ楽譜は従来、夢二画のイメージで語られてきた。もちろん「夢二式美人」のイメージを求めてセノオ楽譜を買った女学生もいたことだろう。しかし本研究が示したように、セノオ楽譜が内包するのはそれだけではない。おそらく西洋音楽を自ら嗜むということに対する、モダンな、あるいはハイソなイメージも有していたのではないだろうか。西洋音楽への入り口が大きく開かれ始めた時代、セノオ楽譜は人々のニーズによく応えていた。だからこそ、他の追従を許さぬほどの人気を獲得することができたのであろう。

そして、レコードや雑誌などさまざまなメディアが交錯する中で、セノオ楽譜は出版され、受容された。このことは、妹尾の幅広い活動・人脈がその基礎を形成していると言える。つまり、妹尾の多彩な「顔」 若い頃は声楽家として舞台に立ち、作編曲や歌詞の翻訳をしたほか、外来演奏家のマネジメント、評論家として音楽雑誌に多くの記事を寄稿、また日本で最初のラジオ放送に携わる、等々 これらの活動が相乗効果を挙げ、日本の音楽界の最高峰で活躍する人々との信頼関係が、彼の活動全体を支えていた。とりわけ、山田耕筰との若い頃からのつながりは、さまざまな局面で妹尾幸陽の活動に影響を与えていた。また、演奏会のマネージャーとして多くの外来演奏家と知り合いになったことも大きかったと思われる。マルチな「音楽事業家」だった彼にとって、楽譜出版はけっして他の活動から独立した事業ではなかったのである。

このような活動をした日本人は、大正時代には彼しかいない。たしかに妹尾の活動は、一つ一つは大正時代を象徴する典型的なものばかりである。しかし、それら全てを一人でやろうとした人は他にはいなかった。けれども一人でやったからこそ、さまざまな音楽界を横断した多彩なレパートリーを備える楽譜シリーズが刊行できたのだろう。音楽の表舞台に出ることはなくとも、妹尾幸陽の仕事は、音楽界を支える重要な一部であったのだ。

堀内敬三は、大正時代の音楽界を振り返り、次のように述べている。

其の頃の学生は今の学生のようにベートーヴェンだのショパンだのドビュッシーだの名曲をいつでも聞くと云うわけに行かないばかりか、一体どの曲が芸術的でどの曲が卑俗なのか区別もつかなかった。其の頃の聴衆はドルドラの「スーヴニール」も、ベートーヴェンの「神の栄光」もイヴァノヴィチの「ドナウ河の漣」も、ショパンの夜曲もアイレンベルクの「森の水車」も同じように名曲だと感激していた。

これは直接セノオ楽譜のことを言っている箇所ではない。だが、ここで言及されている作品のほとんどが、セノオ楽譜で出版されている。

この時代の日本では、堀内が言うように、そしてセノオ楽譜に表れているように、いわゆる「芸術音楽 E-Musik」と「ポピュラー音楽 U-Musik」といった区別が存在せず、西洋の音楽が並列的に受容されていた。セノオ楽譜の幅広いレパートリーを「玉石混交」とってしまうことは簡単である。ベートーヴェンとイヴァノヴィチとさらには妹尾幸陽の作品が、並列的に提供されているのだから。しかしそもそも、玉石混交だと今日の価値判断で音楽の良し悪しを判断するのは危険なことであり（必ずしも今日の価値基準が永久的とは言えない）、そうした見方では当時の感覚が見えてこない。重要なことは、その多種多様なレパートリーがセノオ楽譜の

購買者に対して、ということは大正時代の音楽愛好家の大部分に対して、価値判断を伴うことなくフラットに開かれていたということである。そしてそれが受け入れられたのが、大正時代だった。そのような大正時代の音楽に対する価値観を、セノオ楽譜はよく伝えている。

#### 引用文献

堀内敬三「音楽に目覚めた頃」『音楽の友』第7巻2号、1949年。

なお、詳細な成果報告については、以下をご参照いただきたい。

<https://drive.google.com/open?id=1zctxwhzXStUepI9tRPLjuhSxGmn-vuTC>

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

越懸澤麻衣「大正時代の楽譜出版 セノオ楽譜を中心に」東洋音楽学会第69回全国大会、2018年11月11日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。